

戦後75年、「広島市の教育」に期待したいこと

福山大学人間文化学部教授 小原 友行

小原友行 先生

こばらともゆき

1951(昭和26)年 広島県尾道市瀬戸田町生まれ 【専門分野】社会科教育学, NIE学
【研究テーマ】社会科教育, NIE, 市民的資質 意思決定, アクティブ・ラーニング
【主な活動歴】全国社会科教育学会会長, 日本NIE学会会長, 中国四国教育学会副会長,
文部科学省中央教育審議会専門委員 等 多数歴任



【主な経歴】

1974(昭和49)年 広島大学教育学部高等学校教員養成課程卒業
1979(昭和54)年 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期単位修得
1979(昭和54)年～ 高知大学教育学部(助手・助教授)
1986(昭和63)年～ 広島大学(学校教育学部・教育学部・大学院教育学研究科)助教授・教授
2017(平成29)年～ 福山大学人間文化学部教授

【広島市関連】

★広島市検証改善委員会委員長(H19)
★学習指導計画策定会議 言語・数理運用科部会委員長(H19)
★広島市立学校適正配置等あり方に関する検討協力者会議座長(H20)
★広島市学力向上推進評価委員会委員長(H24)

★「広島県における初期社会科授業論の展開」(1996)

★「1955版『小学校学習指導要領社会科編』に準拠した授業論 -広島市における社会科プランの分析を中心に-」(1999)等 広島市の教育に関する研究論文多数

広島市は、2020(令和2)年8月、「75年は草木も生えぬ」といわれた被爆から75年を迎える。この機会に、戦後75年間の歩みを振り返りつつ、これからの「広島市の教育」への期待について熟考してみたい。

最大の期待は、「国際平和文化都市広島」に生まれ育った子どもたちに育みたい「もう一つの学力」を大事にしてほしいことである。本年度から小学校において全面実施となる新学習指導要領が求める学力は全国共通であるが、それに加えて、広島市に生まれ育った子どもたちにこそ育みたい「もう一つの学力」があるのではなからうか。その育成こそが、「広島市の教育」が目指すものであろう。ここでは、それを「国際平和文化創造力」として提案しておきたい。その育成は、広島市民が戦後一貫して求めてきたものであり、これがなければ「広島市の教育」とは呼べないアイデンティティの一つでもあろう。

戦後初期の広島市の代表的な教育実践に、「己斐プラン」(広島市立己斐小学校)と「緑井教育」(当時の安佐郡緑井村立緑井小学校)がある。前者は、児童が社会生活のなかで直面する切実な問題をねばり強く追究し解決していく「生活問題解決学習」を原理とした学習プランで、1949年に『己斐プランの展開』として刊行された。学校教育の中心をなす「社会生活課程」の代表単元である第6学年の単元「広島と平和」では、平和都市広島の復興について徹底的に調べたうえで、広島・日本の再建策や現実社会生活の問題の解決策について考え合い、「理想日本の夢」について表現する授業が展開されていた。一方、後者では、当時の緑井村が直面していた地域の社会的問題の解決策を考え合う、「社会問題解決学習」が展開されていた。1954年に発表された『緑井教育 第一集』の中にある第4学年の社会科単元「風水害」では、大田川中流域の地域の切実な問題である水害を教材として、どうしてこんなに水害に合うのか、どうすれば水害にならないか、私たちにできることはないかを考え合う授業が展開されていた。両実践に共通するものは、今日でいえば、よりよい社会の形成を目指した「アクティブ・ラーニング」型学習と呼ばれるものである。

このような実践の背後にあった学校・教師や地域住民の願いは、今も変わらず、「ヒロシマを受け継ぎ、地球的視野で考え、相互の基本的な人権を尊重し、よりよい人間社会の創造のために貢献し、国際社会に通用する広島人になるとともに、地域で平和のために汗を流せる人」を育てたい(に育ててほしい)という、広島市の学校教育の「目指す子ども像」であろう。

このような子ども像の具体的な姿は、毎年8月6日の平和記念式典で「平和への誓い」を述べる児童に見られる。2007(平成19)年度の「平和への誓い」では、6年生の児童2名が、原爆の悲惨さを紹介した後、「しかし、原子爆弾によっても失われなかったものがあります。それは生きる希望です。」と、述べている。また、「平和な世界をつくるためには、『憎しみ』や『悲しみ』の連鎖を、自分のところで断ち切る強さと優しさがが必要です。そして、文化や歴史の違いを超えて、お互いを認め合い、相手の気持や考えを『知ること』が大切です。」と、続けている。そして最後に、「私たちは、あの日苦しんでいた人々を助けることはできませんが、未来の人々を助けることはできるのです。私たちは、ヒロシマを『遠い昔の話』にはしません。」と、結んでいる。

歴代の「平和への誓い」にみられる広島の子どものメッセージからは、戦争や原爆の事実を知るだけでなく、その背景を熟考し、自分なりの意見や考えをもち、それを表現しながら平和な社会形成への参加・参画を考えようとしている姿が読み取れるのではなからうか。それは、人間として普遍的に大切なものであると同時に、「広島市の教育」だからこそ大事にする必要がある「もう一つの学力」、すなわち「国際平和文化創造力」を身につけた子ども像である。「広島市の教育」で育った子どもたちがデザインする、未来の希望の物語に期待したい。